

あとがき

当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は今年で第六回を迎える。今回は1961年以来ニューヨークで活躍されている荒川修作さんにお願ひし、油彩の連作6点ならびにこの制作のためのデッサン5点を展示することとなった。荒川さんの東京での作品発表は1979年の西武美術館の展覧会以来のことである7年振りのことである。

この展覧会のカタログには、イタリヤの小説家イタロ・カルヴィーノのアラカワ論「精神の色彩」(米川良夫訳)、作者自身の制作ノート(本江邦夫訳)、林紀一郎氏のエッセイ「瀧口修造/アラカワ/意味のメカニズム」を掲載した。

また今回の展覧会を記念し、大型のポスターを作成した。このポスターの作品のタイトルは“The Virgin, the Vivid, the Fine Today”で、左側のフレームは鏡になっている。その鏡に1歳乃至1歳半の裸の幼児の背中を映して写真を撮ってほしい、という荒川さんの注文で、一夜、当画廊で、関係者は甚だ緊張かつユーモアに満ちた数時間を過した。モデルはこの作品の撮影者上野則宏さんの息子の優史ちゃんである。荒川さんは作品と同サイズのポスターを作りたいという強い希望を示され、私もこれは面白いと思い検討したが、印刷機や紙等の問題もあり、現時点で可能な最大のサイズで作成することで妥協せざるを得なかった。この事情を一言申し添えておきたい。

オマージュ瀧口修造展を続けて行く過程で、瀧口先

生とのいろんな組合せが考えられるが、瀧口：荒川という組み合わせは絶対欠かせないものである、と考えていた。七年前の西武美術館でのアラカワ展の際、インタビューに答えた荒川さんはこの展覧会は瀧口修造だけに見てもらえればそれでいい、という意味の発言があり、当時話題となった。周囲のことを気にせぬ甚だダイレクトな発言であるが、しかし瀧口先生をめぐる諸作家はみな、先生と直接ジカに接しているという意識が強烈であり、この言葉はよく分るのである。

今回、ポスターやカタログを作る過程で、この2人の名前が気になった。修造と修作。外形は似ているようで一寸違うが、ナカミは同じ、といった趣きがある。そういえば瀧口と荒川というのもマンザラ関係がないわけではない。何ともしやセワのゴロ合せみたいで、こんなことをとりあげて言うのもどうかと思う。しかし、私にはこのどうしようもない不思議な暗合、コインシデンスが気になるのである。お二人の絆の強さを感じるのである。この展覧会が必然である所以であろう。

荒川修作の作品でもっとも衝撃的であったのは、初期の作品で、布を張ったボックスのなかに綿とコンクリートのかたまりが置かれているオブジェをみた時である。これはドキリと胸にきた。これは一体何だ。今なお私の記憶になまなましいほどの衝撃を与えた原因は何か？その秘密は何だろう。

1965年(昭和40年)、南画廊のアラカワ展の印象は鮮明である。透明で冷たい画面は緊張感に溢れ、デリケートで大層優美であった。この優美さは今も変わらない。ところで、このアラカワの画面の優美さについて考えると、私は梶井基次郎の「桜の木の下には」という短篇小説がフト脳裡に浮んでくるのである。つまり、アラカワの画面の下には私をドキリとさせたさきほどのオブジェの「秘密」が隠されているのだ。そうでなければあ

んなに優美であるわけがない。私はそう思っている。

荒川さんと最初に逢ったのは、ずっと後で1984年7月、娘の真知とともにニューヨークのスタジオを訪ねたのが最初である。訪問の用件はオマージュ瀧口修造展の出品依頼であった。それから3年、荒川さんは当画廊のスペースに合せ6点の作品を作成していたのである。去る3月、この展覧会の最終打合せに女房とともにニューヨークを訪ね、荒川さんと3回延15時間、荒川さんの熱気にあおられながらいろいろの話題を交え話し合い楽しかった。そしてこの展覧会開催の運びとなったのである。

この展覧会は、まさしく瀧口修造のオマージュのために、瀧口修造をモチーフに、瀧口修造を敬愛する荒川修作が3年がかりで書き下した作品である。あり合せの作品を並べるのとはチト訳が違うのである。それだけに気合の入った作品である。この展覧会を一番喜んでいらっしやるのは地下の瀧口先生であることは間違いない。久し振りに東京に来ていながら、瀧口先生の臨終に、タッチの差で間に合わなかった荒川さんとしては、7年振りの東京でのこの展覧会は感慨一入のものがあるかと推測するのである。

この展覧会のため荒川さんは来日し、マドリン夫人も後半合流される予定ときく。久し振りの日本で多くの友人と旧交を温められ、芸術、哲学、宗教の各分野でしかるべき人達と逢って話したいという荒川さんの希望が果され、それが実りあるものであることを希うとともに、荒川夫妻のご健勝を祈るものである。

最後にこの展覧会実現のため色々ご協力いただいた海藤日出男、林紀一郎、本江邦夫、高木啓太郎の各氏に深謝申し上げます。ありがとうございました。

1986年5月7日

佐 谷 画 廊

佐 谷 和 彦